HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山古志村における震災復興と都市農村交流 ： 支援から交流への転換とグリーンツーリズムの深化
Author(s)	清野, 隆
Relation	自然災害復興における観光創造 = Natural disaster recovery and Tourism creation
Citation	CATS 叢書, 9, 97-114
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61190
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS9_10seino.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

西山徳明，西川克之，花岡拓郎，平井健文編
『自然災害復興における観光創造』
CATS 叢書第 9 号: 9 章 97-114，北海道大学観光学高等研究センター（2016）

山古志村における震災復興と都市農村交流
支援から交流への転換とグリーンツーリズムの深化

清野　隆
江戸川大学社会学部講師

1. はじめに

1.1 研究の背景

みなさんこんにちは，清野隆です。よろしくお願いいたします。本日は，「山古志村における震災復興と都市農村交流」というタイトルで発表させていただきます。

お手元には今回の発表を要約したものを資料としてお配りしております。また，ご参考に回覧していただきたいのが，宮本常一氏の『歩く・見る・聞く』です。今回の発表は，2004 年の新潟県中越地震以降の話ですが，それ以前に宮本氏が同地を訪れて調査講演をされています [1]。この事実もこれからの山古志村を考える上で重要ではないかと考えています。もう一つ回覧していただきたいのが，「やまこし夢プラン」です。震災からの復旧後に村をどのようにすべきかという計画が作られました。これは山古志住民会議という住民組織によって作られたものです。

まず自己紹介をさせていただきます。私は現在，江戸川大学社会学部で講師をしております。東京工業大学で社会工学を専攻し，コミュニティ・デザインを学びました。最近では，地域の歴史を踏まえた空間の形成がどうあるべきかという「地域文脈デザイン」をテーマに研究をしています [2]。地域の歴史の中でも災害はとても重大で後世に影響を及ぼす出来事であると考えています。そういう観点からも，今からご紹介する山古志村を研究しています。また現在限界集落と呼ばれる集落がたくさんあるわけですが，こうした所の集落居住はどうあるべきかという観点からも山古志村を研究しています。

山古志村の研究については，私自身も長く行ってはいますが，その基盤となるものがあります。それは東洋大学福祉社会開発研究センター[3]による一連の成果で，山古志村の復旧・復興支援が長らく取り組まれてきました。そのセンターに私も身を置いて研究をしておりました。研究センターでは内田雄造先生と明峯哲夫先生からご指導を受けました。残念ながらお二人ともすでに亡くなられました。明峯先生は今日の会場である北海道大学のご出身ですので研究センター当時のいろいろなことを思い起こしました。同センターによる研究を発展させて，山古志村において科研費で研究を展開しております。本日の発表は，その一部としても位置づけられます。

1.2 研究の視点

はじめに，今回の発表に際しての，私なりの研究の視点を紹介させていただきます。一つは，災害，復興，観光がどのように関連しながらまちづくりが進んでいくのか。もう一つは，支援から交流への転換です。

まず，災害，復興，観光の関係性をどのように捉えているのかをご説明します。これらを計画論的に捉えて，その現象を今後に活かせないかという視点で見ています。図 1，2 のように，災害，復興，観光はそれぞれにさまざまな作用を起こしていると考えられます。本日は特に復興と観光の関係性を見ていきたいと思います。つまり，昨日から話題になっています通り，災害から救急，復旧，復興へと時間が進行していく中で，観光というものがどのように作用しているのかということです。支援から交流への転換という視点については，図 3 のように災害が発生するとそこには支援がたくさん投下され，それが継続すると地域と来訪者の交流が生まれてくるという現象が起きています。時間軸の中でさまざまな現象がどのように絡み合いながら，現在へと至っているのかを考察したいと思います。

また，震災復興に限らず，今後の問題として集落居住についても考えていきます。山古志村では，災害をきっかけに，個人の生活再建のことや，山古志村の事例では集落をいかに再生するのか，産業をどうするのかということが議論されました。しかし，その内容は，震災以前の姿を取り戻すというものではありません [4]。人口減少，高齢化，集落の空洞化などで社会が縮退していくという状況を踏まえた上で，個人，集落，村の将来をどうするべきかが検討されました。また近年では，農業の六次産業化 [5]が積極的に進められていますし，都市住民のいわゆる UIJ ターンといった田園回帰が実際に進行しています [6]。そのような課題解決が期待される側面も踏まえて，地域の資源をどう活用していくのかということも検討されました。このように，全国各地の集落が抱えている普遍的な課題と取組みの事例としても，山古志村から学ぶべきことは少なくありません。つまり，復旧，復興という段階に限らず，より長いスパンで集落居住，そして観光を考察することが必要であると考えています。

2. 山古志村の紹介

2.1 山古志村の概要

ここで，簡単に山古志村をご紹介します。山古志村は，新潟県長岡市の一部です。新潟県中越地震が発生した直後，2005 年 4 月に長岡市に合併されました。この発表では一貫して山古志村と表記させていただきます。平坦な土地のない山間の村であるのですが，一方で長岡駅から車で 30 分ほどの，都市に近いところにある村という特徴もあります。1950 年代には 6,000 人を超える人々が住んでいましたが，現在の人口は 1,096 人です。災害との関連を見ていくと，災害が発生する直前は 2,123 人でしたが，復旧・復興が進み

多くの人が帰村して安定した状況になった時には，1,429 人という人口になっていました。帰村率は 7 割弱でした。帰村から 7 年が経過した現在ではさらに人口が減り，高齢化率も 48.5%に達しています。村全体として捉えた際には，いわゆる限界集落という基準に間もなく当てはまるという状況です。

2.2 山古志村の特性

山古志村は山村ですので，そこにある暮らしは「農的な暮らし」，つまりお米を作る，野菜を作る，山菜を採るというスタイルを基本としています。土地の形状は，ほとんどが斜面地で，平坦地は狭小な形になっていて，こうした制約から営農は自給的なものです。農業の大規模化が非常に難しい土地です。伝統文化としては，とても大事なものが二つあります。一つは錦鯉の養殖です。錦鯉は山古志村で発祥したものです。山古志村では食用に鯉を飼っていたのですが，江戸期に突然変異によって錦鯉が生まれたということです。現在の日本ではかつてのように錦鯉が売れなくなっており，中東や中国，ヨーロッパの人たちとグローバルにビジネスをしているという状況になっています。もう一つが牛の角突きです。これは闘牛ともいわれます。かつては農耕用にそれぞれの農家が牛を飼っていました。村内で牛を連れて歩く時に，牛の小競り合いが起きないように，この角突きで序列を決めていました。また娯楽としても行われていたと言われています。今では，闘牛場もかなり立派なものが出来て，多くの観光客を呼び込んでいます。気候風土も特徴的です。豪雪地帯で，年間の 3 分の 1 は雪とともに暮らしています。雪の量はとても多く，1 月，2 月は 3m から 4m 程度の積雪があります。当然のことですが，冬期は雪の処理が毎日の日課になっています。現在，若年層の減少により，特に高齢者にとってはこの雪の処理が非常に大きな負担になっています。

山古志村の歴史を考える上では，大切なことが二つあります。一つに，宮本常一氏の影響です。宮本氏の調査の成果が，現在の山古志村の暮らしの捉え方や，それを守ろうとする気持ち，そしてそれを観光で活かそうとする気持ちに影響していると言えます。もう一つが，田中角栄氏の影響です。山古志村は長岡市から 30 分程度の距離と申し上げましたが，これは幅が広くきちんと舗装された国道が通されたことで実現したことです。田中氏の影響で村が外に開かれていったと言えます。

3. 中越大震災と復旧・復興の取組み

3.1 中越大震災の概要

ここから，この 10 年程度の山古志村について，時系列に沿ってお話しします。まずは新潟県中越地震についてご紹介します。地震の発生は 2004 年 10 月 23 日で，震源は隣町の川口町（現長岡市）で，マグニチュード 6.8 の巨大な地震でした。山古志村では，死者 5 名，負傷者 25 名という人的被害に加え，住宅全壊 622 棟，地滑り 329 ヵ所といった物

的な被害が出ました[7]。先ほどの王さんが負の遺産についてご発表されましたが，山古志村の中にも同様の震災遺構があります。それは，地震によって川が堰き止められ，集落が水没するという被害が出た所です。インフラストラクチャー，ライフラインが寸断されたことが大きな要因となって，全村避難という決断が為されました。つまり，一時的にはこの地域に人が住まなくなり，復旧・復興を待つということが起こりました。

3.2 仮設住宅での帰村に向けた取組み

復旧・復興の段階における避難生活や仮設住宅での生活は，現在に至る時間の流れの中ではとても大事な時間であったと考えられます。その結果としていったん避難した人たちがきちんと帰村し，元通りの生活を再建したということです。その際に重要だったのはコミュニティの存在であり，人々が結束力や繋がりを維持しながら暮らしていたということです。たとえば，どこに避難するか，どこの仮設住宅に入居するかという問題に対して，集落単位で移動することが徹底されました。これにより，元々あったコミュニティを維持しながら，復旧・復興に取り組むことが出来たと言えます。

村の人々が仮設住宅に住まわれていた時の取組みをいくつか紹介したいと思います。これらは，特に復興期に大きな影響を与えたのではないかと考えられます。第 1 に，「畑の学校」という主婦たちによる営農グループです。仮設住宅は長岡市の郊外に設置されましたが，仮設住宅の近隣の農地に主婦たちが集まり地場野菜を生産して，販売したり，郷土料理を作ったりという取組みがなされていました。これは，避難時に生活再建につながる取組みとして行われたものですが，帰村後にも，とても大きな影響を及ぼしました。このグループは村に戻ってからも，規模は縮小しつつも継続的に活動を行い，農産物の直売を行ったり，加工品の製造を行ったり，村内にあるスキー場の食堂を運営したりしています。一時的な取組みでは，学校給食に食材を提供していたこともあります。

第 2 に，「いきがい健康農園」という取組みがありました。これは，仮設住宅の近隣に市民農園を作り，希望者に農地を貸して，営農してもらうというものでした。単純に仮設住宅に居たり，今まで住んだことのない市街地に身を置いたりすると，特に高齢者の方は日中にすることがない問題があったそうです。そこで，村で暮らしていた時のように営農するのがよいだろうということで農地が作られました。当初の狙い通り，営農することで健康を維持し，帰村に向けて営農意欲を維持することができたと言われています。そして，もう一つの成果は，こうした場があったことです。農地がコミュニケーションの場になり，あるいは農産物のおすそ分けがコミュニケーション・ツールになったと評価されています。仮設住宅の前には，収穫したものを加工している作業がみられ極端に言えば，仮設住宅にも関わらず，山古志村内の住宅のような景観が出来たそうです。

第 3 に，生活支援相談員・復興支援員です。これは多少観光との関わりがあるかと思います。仮設住宅で過ごすということは非日常的なことであり，そこでの生活をどのように乗り切るかが課題になります。そのような課題の解決と支援のために生活支援相談員が設

置されました。阪神淡路大震災における孤独死の発生を踏まえて中越地震時に創設された生活支援相談員という制度は，非常に高い効果を上げ災害時に必要とされる取組みとして広く注目されています。村民たちの仮設住宅，市街地での不慣れな生活を支援し，心のケア，物的なケアが行われました。ここで興味深いのは，仮設住宅に設置された生活支援相談員が，復旧・復興後の山古志村の復興支援員[8]になり，一緒に山古志村に移動していったということです。現在，さまざまなまちづくりの取組みに携わっている人たちの中に，この仮設住宅の時代から村民をケアしていた人たちが含まれます。こうした長い付き合い，長く一緒に物事に取り組んできたということが，現在の山古志村のまちづくりにとても良い効果をもたらしていると考えられます。ここでは簡単に，生活支援相談員や復興支援員の活動をご紹介します。病院への送迎，訪問見回り，お茶会の開催，時にはイベントを開催してコミュニケーションを図る場を作り，ボランティアの対応やその手続きなども行っていました。生活支援相談員・復興支援員は，元々村民であった人たちではなく，震災をきっかけに山古志村に関わり始めた人たちです。村民が生活支援相談員・復興支援員やたくさんのボランティアを受け入れて，そこでさまざまな繋がりを作ることが出来たこと，生活支援相談員・復興支援員や地域外の人たちと繋がりながら，物事に取り組むことが出来たことは，現在のまちづくりを生み出し，育んだという意味でとても重要であったと考えられます。

3.3 帰村後の復興に向けた取組み

以上のように，村民は仮設住宅で過ごす時期を経て，山古志村へと帰っていきます。続いて，山古志村の「創造的復興」についてお話しします。地震が発生して物理的にも社会的にも復旧・復興が進んでいったのですが，その要点をまとめて評価をしたいと思います。まず物理的には，地域性を踏まえた住宅の再建が行われ，それが評価されています。また，災害を踏まえた集落の再生が為されたと言われています。山古志村では地震の発生自体は決して多くないのですが，元々地滑りが多発する地帯でした。非常に美しい棚田は地滑りが起こって平坦な土地が出来た所に，人の手によって作られたものです（写真1）。ある意味では，強かに生きてきた村民の力の表現でもあるわけです。ここで興味深いことは，災害とは常に村民の生活と隣り合わせであり，村民の方々はこうしたことを踏まえながら生きてきたということです。棚田だけではなく，実は集落の立地も地滑りの発生と関連しています。基本的に，集落は村内でも安全な場所にあるということです。そのため，集落は現地に復旧するということが行われました。ただし 2 箇所だけ，別の場所に設けられました。先ほどお話しした，川の堰き止めの影響で水没してしまった集落などは，やむをえず集落を移転するということが起きました。

続いて，まちづくりの観点から注目したいのは，誰によって復旧・復興が進められてきたのかということです。山古志村では，住民による意思決定，合意形成が盛り込まれた計画が策定されました。この点を詳しく見ていきたいと思います。回覧していただいた「や

まこし夢プラン」は，山古志住民会議という住民たちによる組織で作られました。タイトルが非常に優れており，「つなごう山古志の心」と題されました。ここに観光との関連がみられます。ここで「つなごう」と言っているのは，内の繋がり，世代間の繋がり，そして外との繋がりです。このプランには，「訪れる人々を山古志の心で迎えよう」という言葉が記されています。その意味と背景を解釈すると，復旧・復興のプロセスで，多くのボランティアの方が来て，非常に多くの支援が山古志村に届けられたことに対する感謝であると言えます。これは住民と話をしているとよく伺う話です。のべ 12,000 人の方が山古志村の支援をしたと言われています。その支援へのお返しという気持ちが，さまざまな取組みの基盤になっているのではないかと言えます。各種のイベントが開かれたり，来訪者を受け入れたり，来訪者と交流をしようという取組みは，そういう感謝の気持ちから生まれています。これは注目すべきことですし，東日本大震災で被災した三陸地方でもよくみられることではないかと考えています。災害は非常に不幸なことでしたが，それを契機にして都市の人，外の人との繋がりが生まれ，交流が継続しています。過疎化への対策としてグリーンツーリズムを勧めても簡単には実現できませんが，災害という負の出来事をきっかけに，外の人との交流の良さを知り，後でご紹介するようなグリーンツーリズムを推進しようという動きが強くなったと考えられます。

この「やまこし夢プラン」の中には観光についての言及があります。将来像として「来る人に優しい山古志」になろうと謳い，目標として「交流の受け皿を整備し外との繋がりの持続的発展を目指そう」と言われていることが，観光的取組みとして位置づけられていると言えます。その観光的取組みの「やまこし夢プラン」の中での位置づけについて詳しくご紹介します。図 4 は，「やまこし夢プラン」から抜粋したものです。これからお話しするグリーンツーリズムに連なっていく取組みは，「産業」と「交流」という項目に記されています。産業の欄には，農業，農産物，そしてそこで培われた文化を外に出していこう，あるいは農産物の流通を活発にしよう，山古志ブランドを確立しようということが言われています。一方で，交流，観光への意識の高まりが伺え，山古志の心を感じられるツーリズムを作っていこう，山古志ガイド・グループを作ろうという項目がみられます。

4. 地域資源を活かした観光まちづくり

4.1 農と食を活かした観光まちづくり

このようにプランに位置づけられた取組みは，一言で言えば地域資源を活用した観光まちづくりの実践であると言えます。その具体的な内容をいくつかご紹介します。テーマの一つは，農的な暮らしと食文化を活かした観光，あるいはまちづくりです。「農と食のまちづくり」ということで，農産物直売所，その発展型としての田舎レストラン農カフェがあります。また，そこで調理して提供する特産品の販売を活性化するという取組みもあります。さらに，農産物や特産品を一緒に作りましょうということで，農業体験を受け入れ

たり，食文化の継承のための料理教室を開催しています。写真 2 は農産物直売所です。巷に溢れている，道の駅に併設されて年間の売上が数億円という直売所ではありません。毎回，テントを建てて机を並べ，農産物を並べるような零細な直売所です。買い物をすると調理法について会話が出来るような，アットホームで心の温まる直売所が山古志村には 10 か所ほどあります。このようなスタイルを取っているからこそ，ここで販売している住民たちにとっては，来訪者との交流が出来る場になっています。そして，自分たちが作ったものを誇りに思う自尊心が涵養され，それが生産量の増大や，営農意欲の向上に繋がっています。また，こうした場所があるからこそ，地場野菜を作り，継承していく意識も形成されており，「かぐら南蛮保存会」という組織も出来ました。直売所が活性化してくると，もっと出来ることがあるのではないかと考える人も出てきます。そして，「田舎レストラン」や，特に若者向けの食事を提供する「農カフェ」という場所も作られました。そこで，昔ながらの料理を作るだけではなく，新しい商品開発も行われ，とても人気を博しています（写真 3，4）。現在では，そのために山古志村を訪れるという観光客も生まれています。外の人との交流だけではなく，実は直売所に来る人の半分ほどが地元の住民であり，お茶を飲みながら村民が交流する場にもなっています。村民たちのお茶飲みが日常的に行われると，「今日はあの人が来ないね」という話題になり，高齢者の見守りに繋がります。さらに，高齢者の料理の手伝いという取組みに発展することもあります。

食文化を守ろうという動きは，さまざまな形で表現されています。先ほどの商品開発もその一つです。山古志村の四季の食材を使った料理のレシピが 1 冊の本として記録されています（写真 5）。かぐら南蛮という地場野菜を普及させるために，その野菜が何ものなのか，どのように食べればよいのかということを紹介する冊子も作られました（写真 6）。食と農業の関係では，山古志村を楽しむ側の意識も変化してきました。行って美味しいものを食べればよいというレベルから，一緒に作りたいという気持ちへと変化し，これに応えるような農業体験も実施されています。私も田植えや稲刈りに参加しています。今後，詳細を調査したいと考えていますが非常に多くの人たちが，山古志村でこうした農業体験に参加しています。受け入れ先や窓口がプログラム化されているわけではなく，何かの伝手で参加しているという状況です。また，先ほど申し上げた伝統文化である牛の角突きも復活し，さらに活気を増して継承されています。

4.2 自然災害の経験を活かした観光まちづくり

続いて，地域資源という言い方をすると違和感があるかもしれませんが，防災・災害という資源があります。具体的な取組みや空間として，旧木籠集落を事例にしたいと思います。先に紹介した，川が堰き止められ水没してしまった集落です（写真 7）。これは，災害の恐ろしさ，自然の大きさを伝える震災遺構として，保存されています。木造の家屋をそのまま放置して維持できるのかということが心配されています。「軍艦島」をどう保存するのかということと同様の課題が存在しています。そして，防災や災害を伝える施設と

して「復興交流館おらたる」が開設されました。ここは，まさに災害や被災のアーカイブであり，同時に復旧・復興のアーカイブでもあります（写真 8）。興味深いのは，一つのフロアに，仮設住宅の集会所が再現されていることです。これは，災害が起こった後にどのような暮らしをしてきたかを伝えるものである同時に，住民の方々にとっては大切な思い出が記録された場所でもあります。災害大国である日本に住むあらゆる人々にメッセージを発信する場所であり，住民の方々のための施設でもあります。また，防災面では，「防災グリーンツーリズム」という取組みがあります。これは新潟県が行っているもので，首都圏で直下型地震が起きた時に，こちら側に避難してきてもらうための関係づくりが行われています。具体的には，小中学生の教育旅行の受け入れから，このような関係構築を進めていこうとしています。他にも，被災地間の交流もあります。三宅島の人びとから山古志村が多くの支援を受けたということから，そのお返しとしてお米を毎年三宅島に届けています。岩手県大槌町との間にも，支援や相互交流が行われています。

現在の山古志村の主要な観光資源に，数年前に開設された「アルパカ牧場」があります。震災後にアメリカのコロラド州からアルパカが山古志村に寄贈されたことがきっかけになり開設されたもので，特に子供たちから人気を博しています。アルパカの毛を使った工芸品やアルパカにちなんだお菓子も作られています。

ところで復旧・復興を経た現在でもボランティアの方が山古志村で活躍しています。これは最初にお話ししたことに関連していて，災害直後の非常時に支援した人たちが，地域が復旧・復興を果たした後も，継続して交流したいということで，さまざまな取組みを行っています。たとえば，地震の発生日には追悼式典が挙行されていますが，その式典には多くのボランティアが参加しています。私もこうした機会に現地を訪れたり，学生を連れて行ったりしています。なかでも東洋大学は，頻繁に学生が現地を訪れていて，夏休みには盆踊り大会を行ったり，冬にはどんと焼き（「さいの神」）の手伝いをしたりしています。学生たちは「第２のふるさと」として山古志村を親しんでいるようです。

4.3 住民が主役になる観光まちづくり

ここで視点を変えて見直してみると，山古志村で行われている観光やさまざまな取組みは「住民が主役になる観光」であるという重要な発見があります。これは，山古志住民会議が構想して策定された行動計画が，実践されていることを示しています。最近では着地型観光でも住民を主役にしようという取組みが進んでいます。たとえば，山古志村の棚田や豪雪地帯としての風景を，プロのカメラマンに撮り方を習いつつ写真に撮るというツアーが催行されたり，観光で料理教室を体験したり，あるいは闘牛をただ見るだけではなく，どのように牛は世話されているのかを見学するツアーが催行されたりしています。この場合，写真撮影のガイド役，料理教室の先生，牛の世話を見せる人はいずれも住民の方です。教育旅行も積極的に受け入れられるようになり，民泊，民宿で住民が主役になっています。この教育旅行を契機として，子どもたちと高齢者の方々との交流が多少は続いて

いる場合があるようで，今後どのように展開するのかは大いに期待したいところです。その他，ゆるキャラやその被り物で村を楽しく PR したり，ご当地検定を開催したり，サイクリング・イベントを実施したりと，さまざまな取組みが試みられています。これがどの程度上手くいっているのか，今後も順調に進むのかは検証が必要ですが，現状においてはこのような取組みがさまざまに進んでいます。たとえば，「U・I・J ターン者」向けのイベントでは，東京に山古志村の人びとが赴いて，そこで料理を振る舞いつつ山古志村の PR をしています。ここでひとつ付け加えたいのは，なぜこれほど，様々なことを実践できているのかということです。これは住民だけでは出来ないことであり，先ほどご紹介した復興支援員，元々は生活支援相談員だった方たちが地域に入り，さまざまな交流イベントを開催していることが重要です。それは，地域外という立場だからこそ，地域資源を客観的に評価し，来訪者のニーズに応える形で商品として，提供することができたのだと考えられます。

5. まとめ

5.1 復興と観光の連続性と相互作用

最後に，まとめに入りたいと思います。最初に視座としてお示しした，被災地支援から都市農村交流への移行が山古志村では確認できます。さまざまな支援が，現在の観光や交流に繋がっていると考えられます。より精緻に観察し，サスティナブルな取組みになり得るのか検証すること，計画論へ応用することが今後の研究の課題です。実際のところ，支援から交流へ移行するということは起きているのですが，関わっている人びとの数に目を向けると，こうしたケースは非常に少数派であると言えます。先に申し上げたとおり，のべ 12,000 人が支援したのですが，現在も全ての方が関わっているわけではありません。したがって，こうした連続性をどのように育むかを考えることが必要になります。教育旅行，インターン，大学生の学びによる交流，こうした濃密な交流をすることが継続性を育むと指摘されていますし，山古志村でも必要とされています。そのためのコンテンツが，さまざまに形成されつつあり，観光の力によってグリーンツーリズムやまちづくりが深化しているといえそうです。交流の鏡効果や，外からのまなざしという言い方がされますように，山古志村にあるコンテンツは，元々ポテンシャルが高かったから成功しつつあるというのではなく，災害という出来事をきっかけとした外の人との繋がりや交流が大きな役割を果たしたということです。こうした繋がりや交流が，地域を見直す，自分たちの地域を見直すと動きを生みだし，先ほどからご紹介したような形になってきています。ここに観光と復興のよき関係性相互作用がみられます。

5.2 プロセス・デザインの重要性

そしてここで紹介してきた取組みとその現状を今後どうしていくのかが次の課題になります。これから交流や観光の取組みを，新しい集落居住の形に繋げなければいけません。たとえば村民と，元々住んでいた旧村民と，都市住民が，山古志村をコモンズのようにマネジメントできないかと考えています。また時間という概念が重要であると初めに申し上げましたが，災害から復興までの時間，プロセスをいかにデザインするかということが非常に大事であると改めて強調しておきます。今日お話しした取組みが生まれ，育まれていくプロセスには，その実現に至るまでに様々な出来事が生じ，積み重ねられてきました。たとえば，仮設住宅での生活の中で，人びとが困難を乗り越えてきたことその際に外部の人々の存在があったことがその後の様々な取組みを生んできたと考えられます。つまり，過程にある出来事や取組みのひとつひとつが，現在の山古志村の観光やまちづくりを支えていると捉える視点が重要だと思います。計画論としては，ただアイディアがあるだけでは不十分で，実践と経験といったプロセスが大事といえます。そしてそういったプロセスをきちんとデザインできるかどうかが大切なことであると言えます。

以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

謝　辞

本発表の調査にあたり山古志村の住民，公益財団法人山の暮らし再生機構・山古志サテライトの皆さんに多大なご協力いただきました。また本研究は東洋大学福祉社会開発研究センター・プロジェクト 2「中山間地域の振興に関する研究－山古志地区の復興に即して」（文部科学省・私立大学学術研究高度化推進事業）の成果の一部科学研究費助成事業（課題番号：24611023・代表者：清野隆）の成果の一部をまとめたものです。ここに記して感謝申し上げます。

注

1) 宮本常一氏は，山古志村を 4 回訪問したとの記録がある。1978 年に訪問した際に，村内各地で講演を行った。その内容は，山古志村写真集制作委員会（2005）に記録されている。
2) 地域文脈デザインとは 2009～2013 年に日本建築学会の都市計画委員会内の地域文脈形成・計画史小委員会での議論から提起された概念である。
3) 東洋大学福祉開発研究センターは，文部科学省による学術研究高度化推進事業（現・戦略的研究基盤形成支援事業）の選定を受けて，平成 19 年度に設置された研究機関である。山古志村の研究は「中山間地域の振興に関する研究－山古志地区の復興に即して」をテーマに，平成 19 年度から同 23 年度までの 5 年間に実施された。その成果は，東洋大学福祉社会開発研究センター（2011）にまとめられた。

4) 関東大震災後の帝都復興計画，第二次大戦後の戦災復興計画など，過去の震災復興にみられるように，復興計画は以前のまちを再度建設するのではなく，災害に強いまちの建設を主眼に空間を刷新する性格を持っていることも補足しておく。
5) 六次産業化とは，一次産業が，二次産業（加工，調理など）と三次産業（販売，流通など）を担うことを指す。2010 年に六次産業化・地産地消法の制定など，農林水産省は過疎地域や農林水産業の活性化を目的に，農林水産業の六次産業化の促進に力を入れている。
6) 小田切（2014）は，近年の UIJ ターン，二地域居住，グリーンツーリズムなど，都心住民による農山村への移住と一時滞在の動向を田園回帰現象と呼び，農山村の衰退に歯止めをかける動向として注目している。リーマンショック，東日本大震災以降，田園回帰は顕著になっており，特に若年層の田園回帰への関心が高まっている。
7) 中越地方全域では，死者 67 名，負傷者 4975 名，住宅全壊 3175 棟の被害が発生した。
8) 復興支援員は，その名前の通り，中越地震で被災した地域の復興を支援する役割を担っている。中越地震後に創設された中間支援組織，公益財団法人山の暮らし再生機構から派遣され，地域の様々な活動を支援している。

文　献

小田切徳美
　2009　『農山村再生「限界集落」問題を超えて』東京：岩波書店。
　2014　『農山村は消滅しない』東京：岩波新書。
清野隆・川澄厚志・青柳聡・古山周太郎
　2011　「震災復興期に長岡市山古志地域の農産物直売所が集落再生に果たした役割
　　－地域住民と来訪者の意識に着目して－」『都市計画論文集』46(3):157-162。
東洋大学福祉社会開発研究センター編
　2013　『山あいの小さなむらの未来　山古志を生きる人々』新潟：博進堂。
林直樹・斉藤晋編著
　2010　『撤退の農村計画―過疎地域からはじまる戦略的再編』京都：学芸出版社。
古山周太郎・川澄厚志・清野隆・青柳聡
　2011　「中山間地域における人的支援の実態とその役割に関する研究-長岡市山古志
　　サテライトにおける地域復興支援員の取り組みから－」『都市計画論文集』
　　46(3):901-906。
山古志住民会議
　2009　『山古志夢プラン　つなごう山古志の心』山古志住民会議。
　2010　『山古志夢プラン　つなごう山古志の心～行動計画』山古志住民会議。
山古志村写真集制作委員会編
　2005　『ふるさと山古志に生きる－村の財産を生かす宮本常一の提案』東京：農山漁村文

化協会。
山下祐介
2012　『限界集落の真実　過疎の村は消えるか』東京：筑摩書房。

写真１　山古志村の棚田の風景（筆者撮影）

写真２　山古志村の農産物直売所（筆者撮影）

写真３　震災後に商品開発された山古志弁当（筆者撮影）

写真４　震災後に商品開発された山古志バーガー（筆者撮影）

写真５　山古志村の郷土料理のレシピ集（筆者撮影）

写真６　地場野菜かぐら南蛮のレシピ集（筆者撮影）

写真７　水没した木籠集落の様子（筆者撮影）

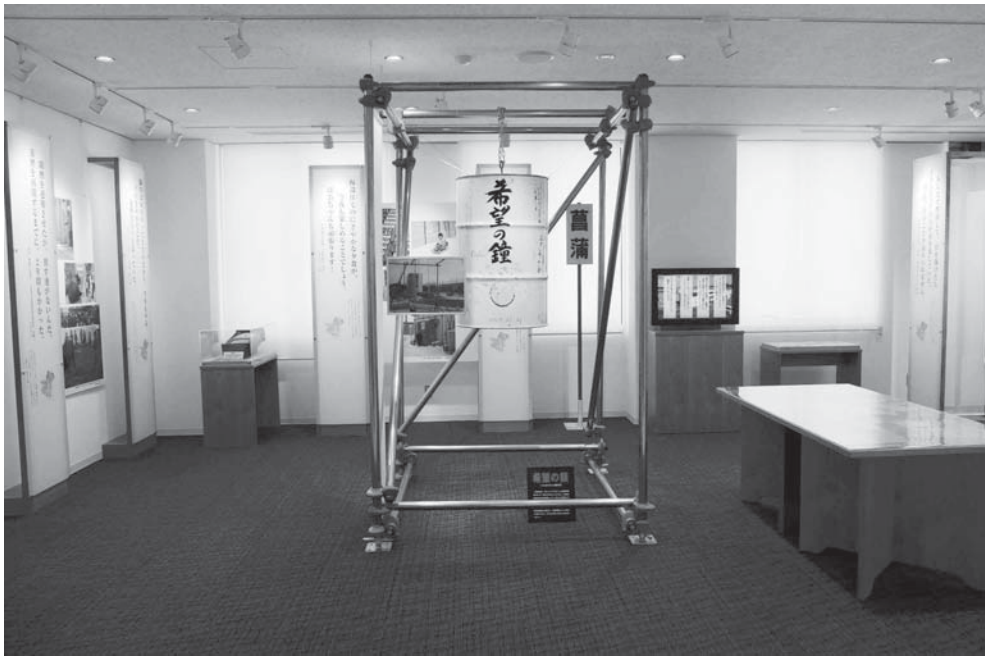

写真８　復興交流館おらたるの震災アーカイブ（筆者撮影）

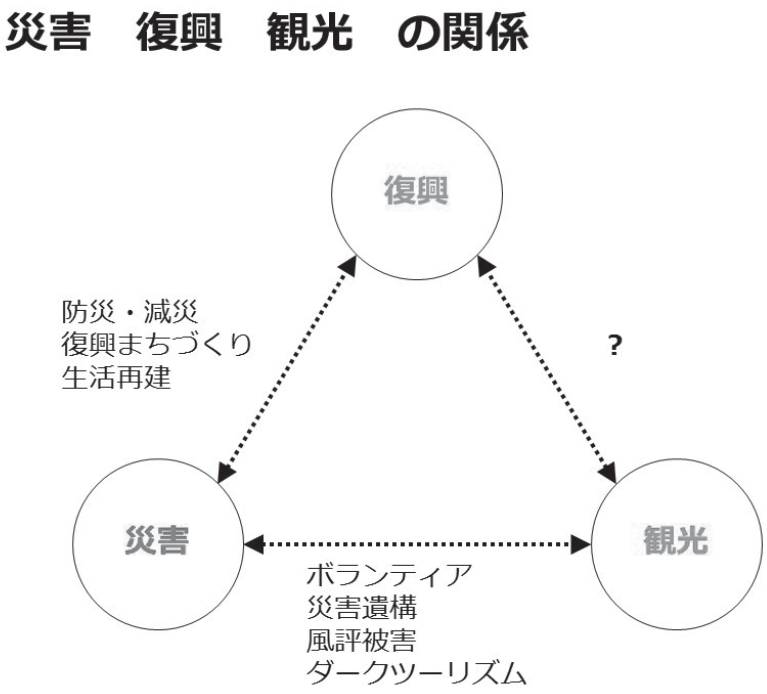

図１　災害と復興と観光の関係

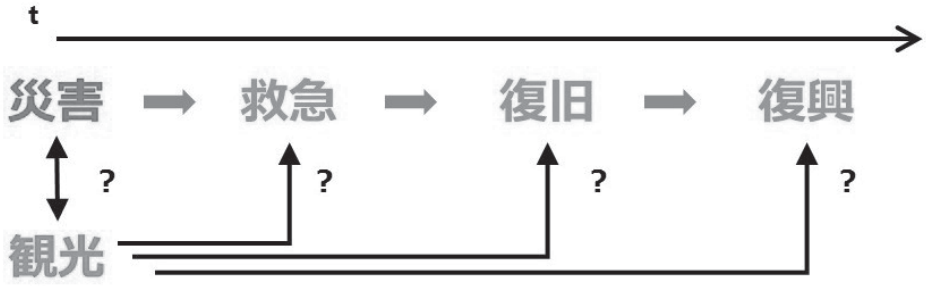

図２　災害から復興へのプロセスと観光の作用

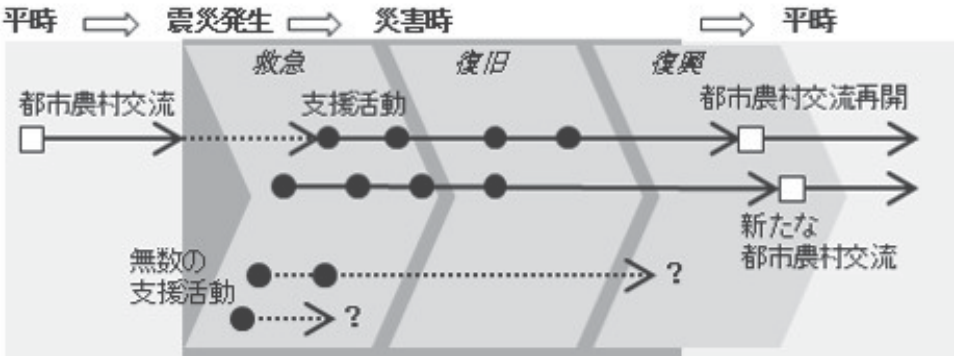

図３　被災地支援から都市農村交流への転換

【基本構想】掲載事業	【行動計画】掲載事業
産業	**産業**
美味しい山古志メニューの提供	特産品開発事業の展開
特産品開発	農産物販売支援事業の展開
山古志牛・野菜まんの開発・販売	錦鯉による地域づくりの推進
どぶろく特区を利用したどぶろく作り	闘牛による地域づくりの推進
農産物等集荷システム	山古志ブランド推進事業の展開
農産物共同販売所	グリーンツーリズム産業の情報発信
錦鯉，闘牛に関する情報発信	
包み・パッケージの統一・デザインの策定・統一	
山古志総合企画の設立	
交流	**交流**
山古志の心を感じられるツーリズム	山古志らしいツーリズムの情報発信
農家民泊・農家民宿の整備	交流促進事業の展開
姉妹都市提携の推進	山古志らしいガイドの養成
山古志ガイドグループ化	お見合いプロジェクトの展開
お見合いプロジェクト	集落・団体の活動支援
アルパカ牧場の運営	
油夫プロジェクト	

※5種類の事業タイプのうち，産業，交流のみを抜粋した。
　掲載しなかった3タイプは生活福祉，施設整備，仕組みづくりである。

図４　「やまこし夢プラン」で示された産業，交流分野の事業（山古志住民会議（2008）に掲載された図を基に筆者が作成した）